

岩手へボランティア続々

若い力で復興支援

11大学・短大
36人の



被災地に向かうバスに乗る大学生ボランティアら—北区で

東日本大震災被災地の復興を支援しようと、県内11の大学・短大の学生ボランティア36人が22日、北区から、バスで岩手県大槌町に向けて出発した。被災地で25日まで活動する。学生たちは「被災地の現状を知り、少しでも役に立ちたい」と話していた。

【井上元宏】

岡山経済同友会が企画

被災地を継続して支援被災地と岡山のつながりを感じようと、岡山経済同友会が昨年に続いて企画した。北区の市営駐車場であった出発式「AMD A」の協力では、同友会の泉史博代表幹事が「若い力で被災地と岡山のつながりを感じてほしい」と話していた。

大会をして交流を深めたいという。参加する学生たちの被災地への思いはさまざまだ。昨年が続いて参加する環太平洋大3年、炭田優也さん(21)は「町を覆った泥のにおいは頭から離れない。被災地のことを忘れていない」と話した。初めて参加する倉敷芸術科学大1年、河相佑樹さん(18)は「救急救命士を目指しており、被災された方の傷ついた心を癒やせるような活動をしたい」と意気込んでいた。

被災地忘れない

日赤県支部も
市民ら36人派遣

日本赤十字社岡山県支部は22日、岩手県遠野市に向けて市民ボランティアを派遣した。

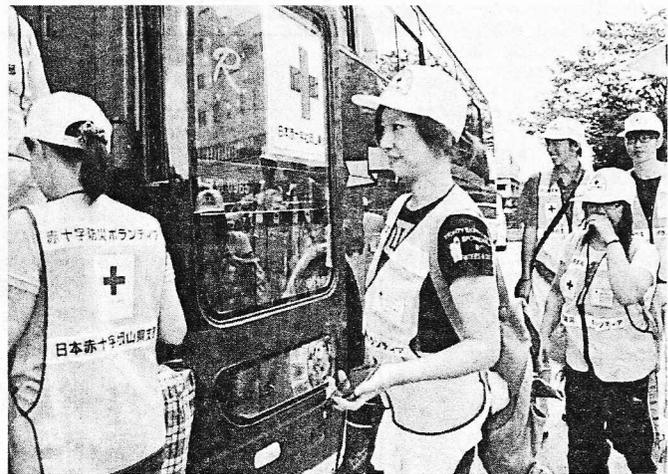
赤十字ボランティアの派遣は今年に入って3回目、延べ60人から3回目、延べ60人が活動。震災から1年以上が経過した今も、被災地を忘れないという思いを伝えていく。これからは、被災者の気持ちに寄り添い、気持ちを行動で表してきたい」と決意を表明し、参加者の土台部分に埋もれた

ままになっている靴や時計などは多く、今も人手が必要とされているという。

今回の派遣は5日間

北区青江の岡山赤十字病院近くであった出発式には、学生や一般市民の参加者36人が参加した。リーダーの会社員、木村剛広さん(45)が「被災者の気持ちに寄り添い、気持ちを行動で表してきたい」と決意を表明し、参加者の土台部分に埋もれた

【五十嵐朋子】



被災地へ向かうバスに乗り込む参加者—北区で